

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00047

研究課題名(和文)古代ギリシア医学における病の位相：女性の身体の発見と医術の観点から

研究課題名(英文)Aspects of Disease in Ancient Greek Medicine: Discovery of the Women's Bodies and the Medical Techniques

研究代表者

木原 志乃(Kihara, Shino)

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：10407166

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、古代の医学文書における女性(の身体)理解を明らかにすることが目的である。とりわけ「ヒポクラテス文書」には、生殖、妊娠、出産に関わる女性の病について多くの情報が提供されている。まず、そこにおける女性の身体の記述を概観した上で、医師や助産師としての女性の存在を再評価した。そして医学文書においては女性の身体が自然科学的・客観的に記述されているだけでなく、ケアの倫理に基づいた視点が導入され、女性がマイノリティとして尊重されていることも確認した。また、その他にも、古代医学における安楽死や脳死の問題、ナラティブの問題、医術や体育術と関連が深い古代オリンピック等についても多角的に考察を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

生殖論や出産や不妊などの女性の病を扱った古代ギリシア医学テキストの考察を通して、女性の身体の発見史を辿ることが本研究の目的であり、これまでに取り上げられてこなかった独自の視点である。また、本研究は古代ギリシアにおける「哲学」と「医学」の両分野の関係性に目を向け、さらには、現代のジェンダー論や生命倫理学に通じる様々な問題をも扱うものである。その点でも、本研究のテーマは分野横断的であり、従来の狭い哲学史研究に終わらない独自性、創造性を強調したい。

研究成果の概要(英文)：The purpose of my research program is to elucidate how ancient medical writers understood women (or women's bodies) in the Corpus Hippocraticum. It has recently been noted by some commentators that the authors of the Hippocratic text left behind many sources on gynecological diseases, as well as the role of women in reproduction, pregnancy, and childbirth. First, I considered how ancient medical doctors understood women's bodies. I also reassess the presence of women in the ancient medical field as patients, doctors, midwives, and therapists. In doing so, I identify the voices of women in medical practices, and confirm that the Hippocratic texts not only depict natural science objectively, but also describe women's bodies based on the ethics of care. Through these considerations, I maintain that Hippocratic writers respected women as minorities in medical practice and that they preserved women's wisdom, which is present in the therapeutic relationship in the form of unspoken voices.

研究分野：西洋古代哲学

キーワード：古代ギリシア医学 ヒポクラテス 医学思想史 女性 身体

1. 研究開始当初の背景

現代社会におけるジェンダー論への関心は高まりつつあり、西洋古典学の歴史的文脈の中で「女性」を検証する試みは増えている。例えば日本西洋古典学会の平成 30 年のシンポジウムテーマは「古代ギリシア・ローマ世界における gender equality – 理念と現実」であり、哲学・歴史・文学の様々な分野から古典テキストにおける「女性」が取り上げられた。また文献面においても、例えば、西洋古代世界における「女性」を膨大な数の史料に基づいて様々な視点から考察した研究論文集として、1970 年代から現在に至るまでの厳選された論稿を通して、研究の全体像を浮き彫りにすべく取りまとめられた書籍が出版された (*Women in the Classical World*. 4 vols., S. Dillon / S.L. James(eds.), Routledge, 2017)。このような古典学研究の動向の中、これまでギリシア医学史における女性の位置付けに関しては注目される機会が少なく、一般的な研究解説書に古代医学と女性の関わりについての言及が見られたとしても文献に基づく詳細な考察はなく、極めて断片的なものにとどまっていた。これを踏まえ、古代ギリシアの医学テキストにおいて、改めて「女性」および「女性の身体」がいかに理解されていたかを詳細に検討し、今日のジェンダー論による問題意識を取り込みながら論じることが、学際的にも興味深い問題提起につながれるであろうと思われた。

2. 研究の目的

古代ギリシア医学における病についての文脈の中で、女性の身体がいかに語られ、見出されてきたのか、テキストの文献学的分析を通して哲学的視点から明らかにすることが本研究の目的である。多くの医学テキストの中には、当時の文化的背景が反映され、出産や生殖に関わる女性の社会的役割が考慮された病の記録となっている。他方、自然科学の客観的な視点から、あるいはケアの倫理に基づく視点からも女性の身体については語られてもいる。また、女性の病は自然概念や神概念に関連づけて語られ、魂や身体についての哲学的問題とも結びつくものである。このように、自然、性、技術、環境、風土、政治などをめぐる多面的な問題に目を向けながら、初期自然哲学からプラトン、アリストテレスらを含め、ガレノスに至るまでの医学思想史の展開の中で女性の身体の発見史を辿ることで、古代ギリシアにおける医の本質を明らかにすることが目指された。

3. 研究の方法

『ヒポクラテス全集』全 10 巻 (Littré, E., *Oeuvres complètes d'Hippocrate, Traduction nouvelle avec le texte grec en regard*, I-X, Paris, 1851/ Adorf M. Hakkert, 1962.) を基礎的な資料とし、女性についての身体記述を丁寧に拾い上げて読み解いた。その際、近年のジェンダー論の研究状況を踏まえながら、古代ギリシア医学思想に立ち返って女性の身体についての当時の見解を明らかにすることの意義について考察した。また、国外研究の動向を見据え、例えば近年テキスト校訂が進み基礎資料が整えられ活発な議論を展開している Van der Eijk, J. Jouanna, C. Gill, R. J. Hankinson 等の研究書を踏まえて、従来取り上げられることが少なかったギリシア医学思想の新たな視野を開拓することを目指した。さらに研究の視野を広げて、生命倫理や医学哲学という観点から、古代ギリシア医学に光を当てることにも努めた。

4. 研究成果

(1) ヒポクラテス文書を中心に、古代医学思想における女性理解を検討した。まず、治療対象としての女性の身体を当時の医学者たちはどのように理解したのかを考察するとともに、さらに、医療現場における治療対象および治療者としての女性の存在について再考し、実践医術の現場における女性の声をめぐる問題を確認した。性差をめぐる近年の問題探求においては、社会的・文化的な性の呪縛からの解放が目指されつつも、生物学的性をも文化的言語的構築物に過ぎないとする立場も現れた。混迷を極めるいわゆる第二派以降のフェミニズムの展開を踏まえて、古代ギリシア医学思想に立ち返って女性の身体についての当時の見解を明らかにすることの意義を慎重に検討し、医学テキストに語られた、あるいは直接語られずとも治療の実践を通して示されたものとして、女性独自の知の在り方をあぶりだすことの可能性を探った。

当時の医学文書には、文化的背景の影響も見られ、女性に対する社会的偏見に通ずる見解も示されていた。病の考察は、ある意味で社会のイデオロギーを伴った語りによって左右されるものであり、そのような医学の領域におけるナラティブな側面にもわれわれは注視せねばならないであろう。他方で、ヒポクラテス医学派のテキストにおいては、そのような影響から脱したところで、なるべく自然科学の客観的な視点から女性の身体について語られていた。さらには医療倫理の実践において自らと異なる存在、とりわけマイノリティーへの配慮、尊重が見られた。まずは女性たちの経験を尊重し、症状の報告と観察に基づき診断する。さらにその診断内容を理解するよう医者が促し、女性は主体的に診断を受け入れて実践する。そのやりとりの中で見えてく

るのが女性自身の身体知のあり方である。これは女性を抑圧するような当時の社会の中で、女性自身が戦略的に持ち得た自らの知のあり方でもあっただろう。ヒポクラテス派のテキストに示されたこのような男女の相互関係の構造は、主体的に交渉する機会が女性にあり、女性の知の啓蒙をも促されるものであった。すなわち男女問わず医療の現場で、他者を尊重した倫理の実践に目が向けられており、さらにはその治療の関係性の中で見えてくるのが、声なき声を発していた女性たち自身の知のあり方である。

このように、医学と哲学の双方のテキストの中で、マージナルな存在である女性について、客観的・自然科学的な考察を目指しながら、倫理的・哲学的に慎重な女性理解を試みている点を指摘し、そのような医学的見地の重要性を浮き彫りにした。

(2) アリストテレス『動物誌』第10巻は現存する彼の医学的著作だとする可能性を考慮し(Cf. Van der Eijk)、これを当時の古代医学における女性論と結びつけて論じた。クニドスの医学派の生殖論と結びつきの深い『動物誌』第10巻の叙述は、『動物誌』第1-9巻、や『動物発生論』と使用用語も異なり、同一の「学問的枠組み」のもとで書かれたものではなく、むしろ学的方法論の違いがそこにあるのではないかということはこれまでに指摘されてきた。この『動物誌』第10巻の特殊性は、その学問の性格が「実践的」である点に目を向けなければならない。すなわち当該箇所では妊娠の失敗に関して、診断の手がかりを提供することを意図しているのであり、女性の側の個別的問題を扱い、治療の要請を念頭に置いて考察されている。アリストテレスが女性の不妊をテーマにし、治療の実践的方法論の重要性を自覚しつつ、この『動物誌』第10巻を医学書として執筆していたとしたら、古代医学思想における女性理解に関して興味深い視点を提供しているということを示した。

(3) 古代ギリシアにおける医術とレトリックの問題について検討した。古代ギリシアの paideia (人間形成、教育、教養) の伝統の中で、ヒポクラテス派の人たちは、素人と専門家の知の乖離について問題にし、双方が持つべき技術知の内実を鋭く問い直したことで、極めて重要な歴史的位にあると言えよう。前5-4世紀以降、医学の専門性は高まりつつあったが、他方で専門的知識を一般市民が理解できるよう指導し、その限りで医術が一般教養としての地位を得たのだからである。そこで、ヒポクラテス派のこの paideia の独自性に注目し、教養の力の源に置かれた医術の本質を再考した。まずは、「言葉(logos)の技術」の問題を取り上げ、ヒポクラテスの医の教育をプラトンのテキストに基づいて確認し、さらには、医術がいかにレトリックと密接に結びついていたかを検証した。そして、病の癒しにおいて、専門家と素人、さらには医者と患者の双方の「語り」がいかにあるべきだとヒポクラテス派の人たちが考えたかを考察した。

ヒポクラテス医学文書において示された技術知の内実、専門知と教養知の両側面の緊張関係の中で、さらにソフィストの活動と近接したかたちで深められていった。言葉は人を動かす力であり、人を癒す力にも重なる。それゆえ力を持つ技術者達が、一般の素人の気づかぬうちにレトリックの力を行使し、意図的に操作可能にする構造になりがちである。医療行為においても、医者が自らの治療を正当化のためのレトリックを用い、言葉を巧みに操作して自らの実践を肯定するよう促す場合が多く見られた。医師の判断は客観的な自然科学的立場に立って価値中立的であるかのように見えて、実際にはそうではない。それに気づかぬまま身体を医者に委ねる患者は、リスクを背負わされることとなる。それゆえ、インフォームド・コンセントの重要性が叫ばれ、また患者不在の診療に警鐘が鳴らされてきた。そしてヒポクラテス医学思想にも患者の権利への配慮が欠けているとしばしば非難されてきたが、実際は医師と患者の対話における権力構造を問い直す視点がテキストに示されていた。すなわち対話の相互的な関係性の中で、日々自分自身を癒しへと方向づけることを医者が患者に諭している。合理性に基づいて、その知を患者自身の内的規範として根付かせ、患者の身体を患者自らが主体的にケアする知恵を育むことで、その力の所在は患者自身へと移行するのである。この点はすでにプラトン自身が医術教育について「魂の世話」と関連づけて言及していたことでもあり、この「語り」を通して知を主体化することこそがヒポクラテス医学の本来の paideia のあり方であった。

(4) 古代ギリシア医学および哲学の文脈において、安楽死および脳死の問題を考察した。古代ギリシアの医学史においては生命が尊重され安楽死が禁止されてきたという見解がこれまでも一般に想定されてきたが、果たして実際にテキストにはいかに語られているのか、そして脳死と魂の死はいかに関係づけられていたのか、等々を明らかにすることが目指された。まず「安楽死」概念のもとにあるギリシア語での「よき死」の理解を、とりわけストア派の哲学およびヒポクラテス医学の文脈から明らかにした。また、ヒポクラテスの『誓い』で語られる文脈をいかに読むべきかの問題を考察し、そこにおける安楽死禁止というこれまでの読解について再考した。古代ギリシア以来、「よき死」とは何か、死はどのように判定されるかに関して、慎重な議論が尽くされてきた。このことを踏まえ、生命尊重主義の立場から古代医学によって安楽死が禁止されてきたと単純に捉えることの誤りを指摘し、また、尊厳死肯定の議論も、すなわち死を選ぶ自由を説く立場や自己決定を強調する立場においても、決して妥協しない知の厳格な位置づけが前提されていたという点も示した。

さらに、脳死に重きを置く現代の死の判定基準と照らして、古代ギリシアの哲学者たちの死の

判定基準を考察した。脳を重視する古代医学思想を見る限りでは、脳という器官を超えて身体とその統括的主体である魂との関わりにこそが強調されていたことを明らかにした。

このように、魂と身体および臓器との関わり、そして魂と死についてのギリシア哲学の議論の中でも、とりわけ「死をめぐる自己決定」と「死を判定する根拠」とをテーマとして、古代以来の哲学者たちの主たる見解を確認することに努めた。

(5) 古代オリンピックにおける、競技者の魂と身体をめぐる哲学知、および医術と体育術の関係、そしてマイノリティの存在について考察した。まず、オリンピックの文化的な側面として、祭典に關与したソフィストの存在と並んで、当時の医者もまたアゴーン精神に満ちて運動競技に大きく關与していた点について考察した。さらに、このような競技者の身体を鍛える「技術」をめぐる医学や哲学側からの評価についてである。体力強化力の技術の位置づけは、医者や哲学者たちのアイデンティティを示す論争とも関連している。祭典の現状を批判し、勝利に導く身体の訓練法は、ギリシア・ローマの時代を通して、「よさ」をめぐる哲学的問題として幾度も検討修正されされてきたのである。とりわけ「医術」(イアトリケー)と「体育術」(ギュムナスティケー)の位置づけをめぐって、医者が目指すべき良い身体状態と、競技者の目指すべき良い身体状態は一致しうるか否かの議論が展開された。具体的には、体育術批判を展開したガレノス、ヒポクラテス、プラトン、それに応答し、体育競技の現状を肯定的に捉えたピロストラトスの記述を確認した。

さらに、古来、多様性が認められずに排除されてきた人々、すなわち女性や障がい者などマイノリティの参画の問題についても考察した。よく知られているように、古代オリンピックは男性のみが参加を許された祭典であった。また、障がい者についての競技祭での記録も倫理的観点から積極的に評価できるものとは言えない。そこで競技者という観点ではなく、オリンピックにみる上層民の多様な関与と社会の階層の変化について、そして祭典そのものへの一般市民の関与に視野を広げて見れば、いくつか興味深い研究も近年見られる。オリンピックやその周辺の競技祭は、そのように社会の階層構造にある意味で揺さぶりをかける契機ともなりうるイベントであったという側面に光を当てて、マイノリティの側の様々な関わりがあった点を指摘した。

(6) 中期プラトン主義者であるプルタルコスについて、その自然学的な側面における認識論の問題を考察した。プルタルコスは『英雄伝』にミラビリアの説明を挟むことによって、異文化や神性および他者性の視点を導入するだけでなく、人物を印象的に特徴付けた。さらに当時の迷信からは距離を置き、科学的知識に基づいた思考の訓練によって人々を哲学へ導く啓蒙的效果をおそらく意図していた。このようなレトリカルな方法は『モラリア』での個々の自然学的考察においても同様である。『食卓歡談集』および『自然学的諸問題』の記述は『英雄伝』とも連動しており、おそらくオリジナルな資料から文脈に巧みに組み込まれている。その際にギリシア自然学の伝統を尊重しながらも、ローマの文化的背景や宗教的背景を踏まえて、それらと矛盾しない仕方で様々な立場を留保しながら論じている。プルタルコスが第二次ソフィスト思潮における最も重要な著作家であると見なされたのも、このようなレトリックを用いた叙述ゆえである。そして、プルタルコスの著作における自然科学的考察の目指すところは共通している。すなわち、たとえそこに確実な知が得られないとしても、不可思議な現象の謎は自然の中に内在し、自然本性的にわれわれを探求へ促す。その限りで、検証可能なものへとその知が常に開かれていることを前提とし、常なる探求へ向かう一貫した哲学的態度をプルタルコスに見ることができるのではないかということテキストの考察を通して明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 木原志乃	4. 巻 69
2. 論文標題 オリンピック-古典古代のからだところ:報告コメント	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 115-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 木原志乃	4. 巻 27
2. 論文標題 古代ギリシア哲学・医学思想における安楽死と脳死 魂と「よき死」の決定について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 モラリア/MORALIA	6. 最初と最後の頁 65-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 木原志乃	4. 巻 121-8
2. 論文標題 古代ギリシアにおける疫病の語り(談話室)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 木原志乃	4. 巻 51
2. 論文標題 ヒポクラテス医学における女性の身体	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古代哲学研究(Methodos) : a Journal for ancient philosophy	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木原志乃	4. 巻 17
2. 論文標題 ヒポクラテス医学におけるパイディア	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ギリシャ哲学セミナー論集	6. 最初と最後の頁 33-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 木原志乃
2. 発表標題 オリンピックー古典古代のからだところ: 報告コメント
3. 学会等名 日本西洋古典学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木原志乃
2. 発表標題 ヒポクラテス医学における女性の身体
3. 学会等名 古代哲学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木原志乃
2. 発表標題 ヒポクラテス医学におけるパイディア
3. 学会等名 ギリシャ哲学セミナー
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木原志乃
2. 発表標題 西洋古代医学思想における魂と死
3. 学会等名 東北哲学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小池 登、佐藤 昇、木原 志乃	4. 発行年 2019年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 348
3. 書名 『英雄伝』の挑戦	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------